

聖ヨハネ・パウロ II 世

# 詩編について

## 第四卷

- ・ 第4週 朝の祈り
- ・ 「ザカリアの賛歌」の解説



『ああ、道行く人よ、歩みを止めて ながめなさい、私の苦しみにひとしい苦しみが またとあろうか！』  
この嘆きの叫びに私たちは声をそろえ、心をつつにして答えましょう。『あなたへの思いは私から消え  
去らず、あなたの憂いは私の魂に強く迫ります！』と。

—アシジの聖クララ

	日	月	火	水	木	金	土
第1唱和	詩編 118	詩編 90				詩編 51	詩編 92
第2唱和	ダニエル3	イザヤ 42					
第3唱和	詩編 150	詩編 135	詩編 144		詩編 144	詩編 147	詩編 8

詩編 118-2

1, 詩編 112 から 118 は古代イスラエルの最も重要で喜びに満ちた祝日、特に過越しの祝いの帰還に歌われたものです。この神への賛美と感謝の一連の賛美歌は「エジプトのハレル」と呼ばれています。その中のひとつ、詩編 114A(113)において、虐げられていた土地、ファラオの支配下にあったエジプトからのイスラエルの脱出と神の契約という素晴らしい賜物を、目に見えるような詩的な方法で思い起こしているからです。この「エジプトのハレル」を封印する最後の詩編が、すでに以前一度黙想したことのある(一般謁見 2001. 12. 5.) 詩編 118 です。

2, この賛歌は明らかにエルサレムの神殿における典礼での使用を表しています。事実、この詩編があらわにしているように、私たちは忠実な人々の家である「神に従う人の幕屋」(詩編 118:15)から進み出てくる行列を目の当たりにします。彼らは神のみ手のご保護を称揚しています。そのみ手は、たとえ残酷な敵どもによる介入があろうとも、義人と信じる人々とを守ることができるのです。詩編作者は印象的なイメージを用いています。「かれらは はちのように私を囲み、いばらの火のように燃え上がったのに、私は神の名(力)によって彼らを打ち砕いた」(詩編 118:12)。

この危険から逃れた後、神の民は、高く上がり不思議なみ業をなしとげられた主の右の手(詩編 118:16 参照)に向かって「勝利と喜びの叫び」(詩編 118:15)を上げます。こうして、よこしまな人々による騒動はいつくしみに委ねられ、私たちは決して一人ではないと意識します。事実、いつでも、切り札は、ご自分に忠実な人が試練に合うことをお許しになることはあっても、決して彼を死の手に渡すようなことはなさない神のものなのです(詩編 118:18 参照)。

3, ここで、行列は、詩編作者が「聖性の門(神の門)」というイメージによって示しているシオンの神殿の聖なる扉という目的地に達したようです。この行列は神が勝利をお恵みになった勇者を伴っています。彼は自分のために門が開かれるようにと願い、こうして彼は主に「感謝」(詩編 118:19)しようとしています。「義人(神に従う人)はここから」(詩編 118:20)彼とともに入るのです。彼が打ち勝った激しい試練と彼の栄えある勝利を表現するために、自分のことを「角の親石(もっとも大切な石)となった」「家造りの捨てた石」(詩編 118:22)に比較しています。

キリストは、ご自分の受難と栄光を告げるために、ぶどう園のたとえ話の最後に、このイメージとこの一節を用います(マタイ 21:42 参照)。

4, キリストは、ご自分をこの詩編にあてはめることによって、この詩編の中にこだましている(詩編 118:1, 2, 3, 4, 29 参照)主の *hesed* 愛深い忠実さに対する信頼と感謝についてのこの賛美歌をキリスト教的に解釈するための道を開いてくださいました。

教会の教父たちは2つの象徴を用いています。まず、「正義の門」です。ローマの聖クレメンスは、コリントの教会に宛てた彼の手紙の中で、次のように解説しています。「多くの門が開かれています。正義の門はキリストの門です。無秩序なことをせずすべてを成し遂げながら、そこを通過して入り、自分の歩みを『聖性と正義』へと導く人は皆祝福されます」(48:4; I Patri Apostolici, Rome 1976, p. 81)。

5, もう1つの象徴は、前のものと関連しているもので、「岩」です。聖アンブロジウスのルカ福音書註解によって黙想することにいたしましょう。フィリポ・カイサリアにおけるペトロの信仰告白について解説しながら、聖アンブロジウスは「キリストは岩である」こと、「キリストがこの美しい名前をご自分の弟子に与えることを拒まなかったので、弟子もまた岩であり、この岩の中に堅忍の力強さと信仰の揺るがない堅固さをみいだすのです」。

聖アンブロジウスは次のように勧告します。「断固として岩であるように努めなさい。しかし、岩であるとは、自分の外ではなく、自分自身の中に岩を捜し求めることです。あなたの岩とは、あなたの活動であり、あなたの岩とはあなたの考えです。この岩の上に、あなたの家が建てられるなら、いかなる邪悪な精神の嵐によっても崩れ去ることはないでしょう。あなたが岩であるなら、あなたは教会の内側にいます。教会は岩の上にあるからです。あなたが教会の内側にいるなら、地獄の門があなたに打ち勝つことはないでしょう」(VI, 97—99; “Opere Esegetiche” IX/II, Mirana/Rome, 1978:Seamo12, p. 85)。

#### 第4週 日曜日 朝課 第2唱和

#### ダニエル 3:52-57

1, 「かまどの中の3人の若者たちは、神に栄光を帰し、神をたたえ、声をそろえて歌った…」(ダニエル 3:51) この一節は、あの有名な歌の導入で、私たちがただ今耳にしたのはその主要部分です。ダニエル書のギリシア語訳の中にだけ見出される部分です。王の像を拝むことを望まず、むしろ燃えるかまどの中での殉教という悲劇的な死に直面する方を選んだ勇敢な信仰の証人たちによって歌われたものです。

この証人たちとは、3人のイスラエルの若者たちのことです。聖書の著者は彼らを、紀元前586年に聖なる都エルサレムを破壊し、イスラエル人たちを「バビロンの流れのほとり」(詩編 136 参照)まで追放した、バビロンのおそろしい支配者ネブカドネザル王の統治という歴史的背景に位置づけています。彼らは、炎がすでに自分たちの体に燃え移ろうとする非常に危険な時に、神を賛美しほめたたえ崇める力を見出し、宇宙と歴史の主は自分たちを死と虚無に見捨てることはなさらないと確信しています。

2, 数世紀後に書き表した聖書の著者は、この英雄的なできごとを、紀元前2世紀のシリアのギリシア人の王たちによる迫害下に信仰の旗を高く掲げるようにと同時代の人々を励ますために描写しています。

伝統的に「3人の若者たちの歌」として知られているこの歌は、抑圧と迫害の時代、イスラエルとキリスト教の歴史にたびたび繰り返されてきた時代の暗闇を照らし出す炎に似ています。迫害者はいつも暴力や抑圧者の冷酷な顔をしているわけではなく、「あなたの神はどこにいるのか」(詩編 41:4, 11)とふざけて尋ねながらあざけりと皮肉によって義人を孤立させることを喜ぶということを私たちは知っています。

3, すべての被造物は、3人の若者たちが残酷な試練の中から全能の神に向かって立ち昇らせる賛美に巻き込まれています。被造物たちが織り成す色とりどりのタペストリー

の中で、星が輝き、四季は花を咲かせ、動物たちはうごめき、天使たちが現れ、「聖なる」「心へりくだる心」者、「主のしもべたち」は歌います(ダニエル 3:85, 87 参照)。

先ほど朗読された数節は、あらゆる被造物への大いなる呼びかけへと発展していきます。それは、超越的でありながら近くにおられる主の偉大な現存を呼び起こすこの歌の最初の部分です。そうです。神は天におられ、そこから「すべての深み見通され」(ダニエル 3:55 参照)、同時にシオンの「栄光、聖なる神殿」(ダニエル 3:53 参照)におられます。神は永遠不滅のみ国の「玉座」に座しておられますが、同時にエルサレムの神殿の至聖所に安置されている契約の櫃の「ケルビムの上に座し」(ダニエル 3:55 参照)しておられます。

4, この御方は、私たちの上におられ、ご自分の力によって私たちを救うことができになる神でありながら、同時にご自分の民の近くにおられ、ご自分の愛を現しながら、この民のただ中にあるご自分の「栄光、聖なる神殿」の中に住むことを望まれた神でもあります。神は、この愛を、ご自分の御子を「恵みと真理とで満たし」「私たちの間に住まわれる」(ヨハネ 1:14 参照)ものとなさることによって、完全にあらわになさるのです。試練と虐待と孤独と死によって特徴付けられている私たちの状態のすべて、罪以外のすべてを分かち合ってくださいるために、私たちのただ中にご自分の御子を送ってくださいることによって、神はご自分の愛の充満を表してくださいるのです。

3 人の若者たちの私たちの救い主である神への賛美は、教会の中でさまざまな方法によって続きます。たとえば、コリントの教会への手紙の終りに、ローマの聖クレメンスは賛美と信頼の長い歌を加えています。それは、たくさんの聖書の引用やおそらく初期のローマ典礼のこだまによって織り上げられたものです。

5, 次のような一節です。「あなたは私たちの心の目を開いてくださいました(エフェソ 1:18)。あなただけが(ヨハネ 17:3)、聖なるものたちの中で常に聖なるものとして留まりながら、諸々の天よりも高いところにおられるということを認識するために。偽証するものたちの横暴を辱め(イザヤ 13:11 参照)、諸国の民のたくらみを投げ捨て(詩編 33:10)、いやしいものを引き上げ、高ぶるものを卑しめられます(ヨブ 5:11 参照)。あなたは富むものとし、貧しくなさいます。殺し、また生き返らせます(申命記 32:39)。あなただけが霊の与え主、すべて肉なるものの神、あなたはすべての深みを見通され(ダニエル 3:55)、人の行いを見守られます。危険の中にある人々の助け、望みを失った人々の救い主(ユディト 9:11 参照)、あらゆる霊の創造主にして守り手。地上の諸国民を増やし、愛するしもベイエズス・キリストを通して、ご自分の愛する者たちを彼らの中からお選びになり、この方を通して私たちを教え、聖化し、誉れをお与えになりました」(ローマのクレメンス、コリントの教会への手紙)。

#### 第4週 朝課 主日 第3唱和

詩編 150: 1-5 2

1, ただ今私たちが唱えた詩編 150 が、時課の典礼の朝の祈りにおいて鳴り響いたのは2

度目になります。祝いの賛歌であり、音楽の調べに合わせた「ハレル」のひとつです。

本文は素晴らしく簡潔で透明感があります。「神をたたえよ、…神をたたえよ、神をたたえよ。」私たちは、主を賛美するやうにとという力強い呼びかけに引き寄せられるはずです。この詩編は、神の神秘に関する2つの要素について、現存しておられる神に開かれています。確かに、神は超越者であり神秘的であり、私たちの地平線を越えておられます。神の宮殿は天の「聖所」であり、「大空」、人間には近づき難い要塞です。しかし、神は私たちに寄り添ってくださるのです。神はシオンの「聖所」現存しておられ、御自分の偉大な「みわざ」を通して歴史の中で働かれ、御自分が「すべてを越える」ことを人に啓示し、体験させてくださるのです。(150:1-2 参照)

2, こうして、天と地の間に交わりの水路が開かれます。この水路において、主のみ業は信者たちの賛美の賛歌と出会います。典礼は、2つの聖なる場所をひとつに結びます。地上の神殿と天の聖所、神と人、時間と永遠。

祈りの間に、私たちは神の光へと向かっていく上昇と、私たちに耳を傾け、語りかけ、私たちと出会い、私たちを救ってくださる神の降下とを一緒に体験します。この詩編は、祈り深い出会いにおいて、私たちの賛美を助けてくれるものを徹底的に探すやうにと促しています。エルサレムの神殿のオーケストラの音楽の調べ、トランペットとか、ハーブ、リュート、太鼓、フルート、シンバルなどです。行列で移動していくことは、エルサレムの典礼の一部分をなしています(詩編 118:27 参照)。同じ勧告が詩編 47:8 にも見られます。「力のかぎりほめ歌え。」

3, このようにして、祈りと典礼の美しさを発見し、その美しさを絶え間なく生き生きとしたものにしていくことが必要です。私たちは、神に向かって、神学的に正しい様式で祈るとともに、美しく尊厳ある仕方で祈るべきです。

その点について、キリスト教共同体は、良心を糾明しなければなりません。そうすれば、音楽と賛美歌の美しさが再び典礼に戻ってくることでしょう。そのような音楽と賛美歌は、その様式の見苦しさ、表現の無味乾燥な形式、そこで祝われている偉大なみ業に相応しくなく、霊の息吹をもたない楽曲から、礼拝を浄化してくれるはずです。

このことに関連して、エフェソの教会への手紙の中に、私たちは、泥酔や下品なことを避け、典礼賛歌の清らかさを保つための空間を作るやうにとという勧告を見出します。「ぶどう酒に酔いしれてはなりません。それは、身を持ち崩す元です。かえって、霊に満たされ、詩編と賛美歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心から誉め歌いなさい。常に、すべてのことについて、主イエズス・キリストの名において、父である神に感謝を捧げなさい。(エフェソ 5:18-20)」

4, この詩編は、賛美を捧げるやうにとという「いのちあるすべてのもの」への招きをもって終わっています(詩編 150:5)。文字通りには「あらゆる息」、「息あるすべてのもの」という言葉は、ヘブライ語では、「息あるすべての存在」、特に「生きている人」を意味しています(申命記 20:16, ヨシュア記 10:40-11:11, 14 参照)。神への賛美においては、何よりもまず、被造物である人間は、自分の心と声に伴われます。彼とともに、あらゆる命ある存在、命の息を持つ(創世記 7:22 参照)すべての被造物が霊において呼びかけられています。こうして、命の賜物のゆえに創造主に感謝の賛美を立ち昇らせることでしょう。

この宇宙的な招きを受けて、聖フランシスコは、あの示唆に富む「兄弟なる太陽の歌」を私たちに遺してくださいました。この歌の中で、フランシスコは、主のすべての被造物のゆえに、また、そこに映し出されている主の美と善とのゆえに、主を賛美し祝するようにと私たちを招いています。(フランシスコ源泉資料集 263)

5, コロサイの教会への手紙の中に示されているように、すべての信者はある特別な方法でこの賛美歌の中に参加しています。「キリストの言葉があなた方の内に豊かに宿り、知恵をつくして互いに教え諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により心から感謝を持って神を褒め称えなさい(コロサイ 3:16)。」

このことに基づいて、聖アウグスチヌスは、詩編講解の中で、神を賛美している聖人たちを象徴的に楽器と見なしています。「あなた方は、喜びに満ちてよく響き渡るトランペット、リュート、ハープ、タンバリン、聖歌隊、弦楽器、オルガン、シンバルです。なぜなら、調和の内に響き渡っているからです。あなた方はこれらすべてのものなのです。ここでは、邪なこと、はかないこと、ばかげたことは何一つ考えてはなりません。」…「主を賛美しているあらゆる霊」は神に向かって歌っているひとつの声なのです。(詩編講解 VI, Oxford, 1857, p. 456)

ですから、最高の音楽は私たちの心から流れてくるのです。これこそ、私たちの典礼の中で神がお聴きになりたいと望んでおられる調べなのです。

#### 第4週 月曜日 朝課 第1唱和

#### 詩編 90

1, ただ今私たちの耳と心にこだました数節は、嘆願の響きをもった知恵にあふれる黙想です。事実、詩編 90 の中で、この詩編を祈っている人が取り扱っている事柄は、哲学者たちによってもっとも探求されてきたこと、詩人たちによってもっとも歌われてきたこと、あらゆる世代とあらゆる宗教の人間が体験的にもっとも感じ取ってきたこと、すなわち、人間のはかなさと過ぎ去っていく時。

私たちののはかなさを示してくれるヨブ記の忘れがたいページについて考えるだけで十分でしょう。事実、私たちは「塵の中に基を置く土の家に住む者。しみに食い荒らされるように、崩れ去る。日の出から日の入りまでに打ち砕かれ、心に留める者もないままに、永久に滅びさる」(ヨブ記 4:19-20)人々のようなものです。この地上における私たちの生涯は、「影にすぎない」(ヨブ記 8:9)ものなのです。ヨブは続けて次のように告白します。「私の人生は飛脚よりも早く飛び去り、幸せを見ることはなかった。葦の小船に寄せられたかのように流れ去り、獲物を追う鷺のように速い」(ヨブ記 9:25-26)。

2, 哀愁を帯びた歌にも似たこの詩編の始まりに(詩編 90:2-6)、詩編作者は神の永遠性を逃げ去っていく人間の時に劇的に対比させています。これこそ彼の明白な伝えたいことです。「あなたの目には千年も過ぎ去った一日のよう、夜回りのひと時にすぎない」(詩編 90:4)。

すでに創世記の記述の中で断言されている通り、原罪の結果として、神の命令によっ

て、人は自分がそこから取られた塵に還るのです。「あなたは塵であり、塵に帰らなければならぬ」(創世記 3:19;2:7 参照)。人間という被造物をご自分のまったき美しさと複雑さにかたどられた御方である創造主によって、「人は塵にもどされる」(詩編 90:3)のです。聖書の用語としての「塵」は死、地下の世界、墓の沈黙の象徴的な表現でもあります。

3, 人間の限界の意味は、この哀愁を帯びた願いにおいて、強烈です。私たちの存在は夜明けに生えだす草のようにはかないものです。突如として干草の山へと運ぶ鎌の刈る音を聞くのです。命の新鮮さもまた、間もなく死の無味乾燥に道を譲らなければなりません(詩編 90:5-6;イザヤ 40:6-7;ヨブ 14:1-2;詩編 103:14-16 参照)。

旧約聖書の中でしばしば起こるように、詩編作者はこの徹底的な弱さを罪と関連付けています。私たちの中には、永遠性ととともに咎められるべきこととが共存しているのです。この理由から、主の怒りと裁きは私たちの生涯に影を落としているように思われるのです。「わたしたちはあなたの怒りに焼き尽くされ、激しい憤りにおそれおののく。あなたはわたしの利賀を目の前におき、…わたしたちの生涯はあなたの怒りで衰え」(詩編 90:7-9)るのです。

4, 新しい日の夜明けに、この詩編によって、朝の祈りの典礼は、私たちを自分の幻想と高慢から目覚めさせてくれます。人間の生涯には限界があります。「七十年、八十年生きるとしても」と詩編作者は宣言します。時間も日も月も「むなしく労苦に満ち、すみやかに過ぎ去り」(詩編 90:10)、年は「ため息のように」(詩編 90:9)終わるのだと。

こうして、このことは大切な教訓となります。主は私たちに「残された日々を数えること」を教えてください、こうして私たちは、この健全な現実を受け入れることによって、「知恵に向かう心を与え」(詩編 90:12)られるのです。しかし、ここで祈っている人は神に何かしらもっと別なことを願っています。それは、たとえ私たちの日々がはかなく悩みに満ちているとしても、この日々を支え喜ばせる神の恵みです。たとえ時の知らせが私たちを引きずり去ろうとも、神は私たちに希望の味わいを味わう恵みを与えてくださるでしょう。主の恵みだけが、私たちの行いに一貫性と永遠性を与え得るのです。

「私たちの神、主がその恵みを注がれ、私たちの手のわざが実り豊かなものとなるように。私たちの手のわざが実り豊かなものとなるように(詩編 90 の最後のこの言葉は、ここにあるように2度繰り返されています)」(詩編 90:17)。

5, キリストの栄光あるお姿を背景に持っているこの詩編 90 について解説している初期キリスト教の伝統についての言葉で締めくくりたいと思います。聖ヒエロニモによってラテン語に翻訳された、キリスト教作家オリゲネスの詩編解説によれば、キリストの復活は「日々私たちに喜びの歌をうたわせて」(詩編 90:14)くれる力を与えてくれるのです。キリストの過越の神秘は私たちの死を越える命の源泉だからです。「私たちの主の復活によって楽しませていた出した後、残された私たちの日々を喜びの内に生きるのです。この主を通して私たちは贖われ、いつの日か立ち上がらせていただきます。この確信のゆえに、私たちの主イエズス・キリストを通して神を崇め、賛美と霊的な歌をもって賛美するのです」(ヒエロニモ訳オリゲネス『詩編書についての 74 の説教』Mirano, 1993, p. 652)。

イザヤ 42:10-16

1, 預言者イザヤの名をいただく書の中で、学者たちは紀元前8世紀に生きたこの偉大な預言者の保護のもとに置かれたさまざまな声を分類しています。ただ今拝聴いたしました第4週の朝の祈りの典礼の一部をなしているこの力強い喜びと勝利の賛歌は、その1つとすることになります。釈義学者たちは、この箇所を、紀元前6世紀、バビロンからのヘブライ人たちの帰還時代に生きた一人の預言者のものとしています。この賛歌は、他の詩編(詩編 96:1, 97:1 参照)にもあるように、「新しい歌を主に歌え」(イザヤ 42:10)という呼びかけによって始まっています。

預言者がヘブライ人たちに歌うようにと招いているこの歌の新しさとは、確かに、解放という広がり行く地平線、すなわち、異国の地で虐げと追放(詩編 137 参照)を体験した民の歴史の中の徹底的な転換点のことを語っているのです。

2, 聖書において、「新しさ」とはしばしばある完全な咎められるところのない現実という味わいをもっています。それは、人類の苦難に満ちた歴史を封印する救いの完成の時代の始まりのしるしと言えそうです。このイザヤの歌は、このようなキリスト者の祈りとしてまことにふさわしい高揚した響きを持っています。

大地、海、島々、荒野、町々を含む全世界は「新しい歌」を主に歌うようにと招かれています(イザヤ 42:10-12 参照)。名も知られていないもっとも遠い地平線、ケダル人が住んでいる荒野より高地の地域(イザヤ 42:16-17)、山々の頂にいたるまであらゆる空間が巻き込まれていきます。多くの人々によって岩場の頂にある町ペトラに属するといわれているセラという町、そのはるか高みにまで私たちの展望が開かれていきます。

地に住むすべての人々が、主を崇め、栄光を帰するために歓呼の声をあげるひとつの巨大なコーラスとなるよう招かれています。

3, 歌うようにと言う荘厳な招き(イザヤ 42:10-12 参照)の後に、預言者はエジプトの奴隷制度からご自分の民を解放なさった脱出の書(出エジプト記)の神として描き出す場面に、主を連れ出します。「神は勇士のようにいで立ち、戦士のよう…」(イザヤ 42:13)。主は、他者をしいたげ、不正なことを命じるご自分の敵どもの間に、恐怖を撒き散らします。

モーセの歌も、主を、紅海を渡る間に右の手を伸ばして敵を打ち砕く用意をしている「勇者」として描いています(出エジプト 15:3-8)。新しい脱出が、ヘブライ人のバビロン追放からの帰還にあてはめられています。信じる人々は、歴史が、運命のお情けや混沌や圧制者の権力にあるのではないことを確信させられます。最後の切り札は、正しく力強い方、神にあるのです。詩編作者がすでに次のように歌っています。「敵に苦しむわたしたちを助けてください。人には救う力がない」(詩編 60:13)。

4, この場面に入ると、主が語り、その激しい言葉は裁きと救いを兼ね備えています(イザヤ 42:14-16 参照)(イザヤ 42:14 は邦訳では省かれています)。「長い間」、主はご自分の「平和を保って」こられたということを思い起こさせることによって始めます。言葉を変えれば、介入することはなさらなかった、ということになります。神の沈黙は、ヨブの長い嘆きが証明しているように、しばしば、義人を混乱させる原因となり、つま



ずきとさえなります。しかし、それは、歴史がひねくれ者の手に渡ってしまったとか主が無関心で無感覚でもあるかのように不在をほのめかしているような沈黙ではありません。事実、この沈黙は痛みをもってあえぎ、うめき、叫びを上げている出産の時の女性に似た反応をあらわにしています。この沈黙は、その終着点として生き生きとした実り豊かな効果をもつ乾燥、破壊、荒廃(イザヤ 42:15 参照)によって描写されている、悪に対する神の裁きなのです。

事実、主は新しい世界、解放と救いの時代をもたらしてください。盲人の目は、輝く光を楽しむために、開かれます。神に、また平和と幸福という神の計画に信頼し続けていくことができるように、道は、平らにされ、そこには希望が花咲きます(イザヤ 42:16 参照)。

5, 毎日、信じる者は、神のみ業のしるしが、表面上は単調で目的もなしに過ぎていく時間の流れによって隠されている時でさえも、それらを識別することができるようになければなりません。高く評価されている近代のキリスト教作家が書いているとおりです。「宇宙はこの地上に心を奪われている。永遠の現実と現存が存在しているから。しかし、この現実はいつも幕屋のベールの下で眠っている。今こそ、存在するすべてのものを通して神が表される、すなわち永遠の現実があらわにされる」(ロマーノ・グアルディニ『詩編の知恵』 Berescia, 1976, p. 52)。

私たちの心が「風に揺らぐ森の木々のように」(イザヤ 7:2)動揺し震えおののいている時でさえ、信仰の目で、宇宙と時間の中に、そして私たち自身の中に、このような神の現存を発見することが、希望と確信の源泉です。本当に、主は「正義とまことをもって」この世界とすべての民を治め、裁くために(詩編 96:13 参照)舞台に入って来られるのです。

#### 第4週 月曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 135

1, 朝の祈りの典礼は、その歩みに従って進む私たちのカテキズムのために、ただ今聖歌隊によって歌われた詩編 135 を差し出しています。このテキストは、明らかに他の聖書の箇所さまざまな言葉の束をしっかりと包み込んでおり、そこには復活節の雰囲気ガしみこんでいるように思われます。ユダヤ教の伝統では関連はありませんが、この詩編は、復活節に主に捧げられる「偉大なるハレル」としてつづく詩編 136 と関連付けられています。

本来、この詩編は、エジプトでの「わざわい」についての考察と約束の地に入るようにという呼びかけによって、脱出(出エジプト)の出来事を前面に出していますが、私たちはこの詩編 135 が最初の 12 節で展開させている、その後起こった出来事の方に眼差しを向けてまいりましょう。それは、ひとつの祈りとへ向かおうとする考察となるのです。

2, この詩編は、数ある詩編の中で主に向かって呼びかけるさまざまな賛美歌のひとつ

の典型的な特徴である、独特な賛美への招きによって始まります。アレリヤを歌うようにとの呼びかけが、「神に仕える者」(詩編 135:1)に向かって述べられています。ヘブライ語の原典では、神殿の聖域に「立つ」者であり、これは典礼における祈りの姿勢です(詩編 135:2 参照)。しかし、霊においては、信じるすべての者が「主に仕える者」の仲間に加えられています。事実、イスラエル全体が主の愛に結ばれ、その証となるようにという選びについての考察のすぐ後で、次のようにつづけています。「神はヤコブを選んでご自分の民とし、イスラエルをご自分の宝とされた」(詩編 135:4)。この展望において、神についての基本となる2つの性質がたたえられています。神は「恵み深い」、神は「うるわしい」(詩編 135:3 参照)。主と私たちとの絆は愛、親しさ、喜びに満ちた絆によって特徴付けられています。

3, 賛美するよという招きの後で、詩編作者は続けて、「わたしは知っている」、すなわち認識している、信じている(詩編 135:5)という言葉で始まる荘厳な信仰宣言をします。この典礼のために集まっている民全体のために、独唱者によって2つの信仰箇条が歌われます。まず、全宇宙におれる神のみ業を崇めます。神は卓越した宇宙の主なのです。「天と地、すべてのふちの上に、神はみ旨のままにすべてをおこなわれる」(詩編 137:6)。神は、混沌、否定的な力、限界の象徴であり、虚無である海とふちにさえも、命令を下すのです。

ご自分の倉から雲、いなずま、雨、風を送り出すのも主です(詩編 135:7 参照)。古代において近東の人々は、神が自然界の構成要素を特別な貯蔵庫、というよりは天の玉手箱にお集めになり、そこから地上に撒き散らす、というようなイメージを抱いていました。

4, もう1つの信仰宣言の要素は、救いの歴史に関するものです。創造主である神は贖い主として認識されます。エジプトにおける奴隷状態からのイスラエルの解放を思い出しています。詩編作者は、脱出の時代の解放者としての神がなさったすべての「しるしと奇跡」を総合する初子の「わざわい」(出エジプト 12:29-30 参照)を冒頭に上げています(詩編 135:8-9 参照)。この言葉の後ただちに、イスラエルの道をふさいでいた困難と障害に打ち勝たせてくださったという劇的な勝利を思い出させています(詩編 135:10-11 参照)。最後に主からの「遺産」としてイスラエルが受け取った約束の地を地平線に見分けることができるようになります(詩編 135:12 参照)。

これらすべての契約のしるしは、次の詩編 136 でさらに明らかに表現され、十戒の第一戒で宣言されている基本となる真理を証ししています。神は唯一であり、み業を行い、語り、愛し救う persona(位格的存在)です。「わたしたちの主は、すべての神々を越えて偉大なかた」(詩編 135:5; 出エジプト 20:2-3; 詩編 94:3 参照)。

5, この信仰宣言に従って、私たちも神に賛美を捧げましょう。聖クレメンズ1世教皇は、コリントの教会への手紙の中で、私たちをこのことに招いています。「全世界の父であり創造主に目を注ぎましょう。その賜物と平和の恵みを大切に、崇め高めましょう。心をつくしてこの方を観想し、この方のご意志の偉大さに魂の目を向けましょう。ご自分のすべての被造物に対して神がどれほど正しいかということだけを考えましょう。そのご命令のままに動く天は、調和よくこの方に従っています。日と夜とは、この方がお定めになった通り、互いに混乱することなしに進んでいきます。太陽も月も数え

切れない星たちも、この方が命じられた軌道からそれることなく、この方の導きに従って調和よく運行していきます。大地はこの方のご意志によって肥沃なものとして造られ、この方のご命令に背くことなく、喜んで、男たちと女たちのためにも、野生の獣のためにも、息とし生けるすべての動物たちのためにも、豊かな実りをもたらしています」(19:2-20:4)。クレメンスは次のように観察しながら結んでいます。「世界の創造主である主は、これらすべてのものが平和のうちに心を合わせて、すべての人々、特に主イエズス・キリストを通してこの方のいつくしみにより頼んでいる私たちに恩恵を施すようにと配置されているのです。この主に栄光と威光が代々にありますように。アーメン」(20:11-12)。

#### 第4週 火曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 144

1,ただ今私たちが拝聴いたしましたのは、詩編 144 の一部です。王の賛歌となっているもので、他の聖書の箇所を織り込むことによって(詩編 8:5;18:8-15;33:2-3 参照)、祈りに充ちた新しい作品としての命を与えられています。ダビドらしい支配者自身が、一人称で語りながら、神が自分の成功の源であるという認識を示しています。

古代のシンボルを用いながら、主が勇敢なイメージで描かれています。事実、主は戦いの教官(詩編 144:1 参照)、不落のとりで、保護の楯、勝利者(詩編 144:2 参照)と見なされています。このような方法で、闇の力、あるいはどうしてもならない宿命的な力でもないし、人類の栄枯盛衰に無関心で無感覚な支配者でもない、歴史の中で悪と戦われる御方である神の神性が崇められることを望んでいます。神をたたえている言葉とひびきとは、詩編 18 やサムエル記下 22 章にあるダビドの賛歌のこだまです。

2,このユダヤ人の王は、神の力強さと比較して、自分が被造物であるすべての人と同様に弱くはかないものであることを認識しています。自分の感じていることを表現するために、この王は祈りの中で詩編 8:4 と 39:5 に見られる 2 つの節を用いて、この 2 つの節を織り込みながら、新しい効果を生み出しています。「神よ、人とは何者か。なぜ人に心を留められるのか。なぜ人の子を顧みられるのか。人は皆、通り過ぎる風。その日々はうすれゆく影」(詩編 144:3-4)。ここで、堅固な確信が浮かび上がってきます。「息とし生ける者の命と人の息とがその手の中にある」(ヨブ 12:10)御方である創造主が私たちの命を保ってくださいるのでなければ、一陣の風のように私たちには実体がないのです。

ただ神の支えによってのみ、私たちの日々の生活の中で出会う危険や困難を乗り越えることができるのです。ただ天からの助けを期待することによってのみ、この古代のイスラエルの王のように、あらゆる形態の虐げから解放される道へと出て行く決断ができるのです。

3,神の介入は世界と人間の歴史を凌駕する神の超越性を描写するための伝統的な宇宙的かつ歴史的イメージによって描かれています。突然噴火して煙を噴き上げている

山々があります(詩編 144:5 参照)。悪を打ち砕くために用意されている主が放たれた矢のような稲光の光線があります(詩編 144:6 参照)。聖書用語では混沌、悪、虚無、つまり、歴史の中で否定的なできごとの象徴である「さかまく海」があります(詩編 144:7 参照)。これらの宇宙的象征は、歴史的なたぐいのものと同列されています。「はむかう者」(詩編 144:6)、「異国の民」(詩編 144:7)、偽りに満ち、偽りの誓いを立てる者たち、すなわち偶像礼拝者(詩編 144:8 参照)。

これは、邪悪、悪、虐げ、不正を描き出すための非常に具体的で東洋的な方法です。この世界を突き進んでいる私たちをこのような恐ろしい現実から、主は解放してくださいました。

4, 朝の祈り典礼が私たちに差し出している詩編 144 は、短い感謝の賛歌で終わっています(詩編 144:9-10 参照)。それは、悪に対する戦いにおいて、神は私たちをお見捨てになることはない、という確信によって靈感されています。この理由から、ここで祈っている人は、十弦の豎琴に合わせて、主は「王に勝利を与え」、「しもベダビドを救われた」(詩編 144:10)という確信に満たされて、メロディを響かせているのです。

ヘブライ語では、「奉献」と言う言葉は「Messiah」です。こうして、私たちは、古代イスラエルの典礼の習慣どおりに、メシア的賛歌に変容された王の詩編を見ているのです。私たちキリスト者は、私たちをあらゆる悪から解放し、隠れた邪悪な力に対する戦いにおいて私たちを支えてくださっているキリストに目を注ぎながら、次のように繰り返さなければなりません。「私たちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界にいる支配者、天にいる悪の諸霊に対するものなのです」(エフェソ 6:12 参照)と。

5, 4 世紀から 5 世紀にかけてゴールに生きた隠修士 聖ヨハネ・カシアノによって示された考察によって終わることにいたしましょう。この詩編 144:5 「神よ、天を傾けて降りて来てください」という言葉によって靈感を受けた「主の受肉について」という作品の中で、彼はこの言葉の中に、この世界にキリストがおいでくださることへの期待を見えています。「詩編作者は、懇願しています。主が肉においてご自身を表してくださるように、この世界の中で目に見えるものとして現れてくださるように、栄光の内に上げられ(I テモテ 3:16 参照)、ついには、聖人たちが霊的に前もって見ていたすべてのことを彼ら自身の目で見ることができますように、と」(L' Incarnazione del Signore(主の受肉)V, 13, Rome1991, p. 208-209)。これこそまさに、洗礼を受けた人々皆が信仰の喜びの内に証しすべきことなのです。

#### 第4週 木曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 147:1-11

1, 今歌われたのは、ヘブライ語原典では 1 つの詩編として保たれているものですが、次の詩編をも含む詩編 147 の中の最初の部分です。ギリシア語とラテン語の伝統では、この歌は 2 つの違う詩編に分割されています。

この詩編は神を賛美するよという招きによって始まり、それから、緊張感のある表現で、神を賛美するべき理由の長いリストが続きます。それらは、特徴的で時宜にかなったものと見なされている神のみ業ですが、間違いなく、人間の生活に対する神の介入(詩編 147:3, 6, 11 参照)に関わっています。特にイスラエルとエルサレムに関するものです(詩編 147:4 参照)。他には被造物としての宇宙(詩編 147:4 参照)、特に、植物と動物に関するもの(詩編 147:8-10)です。

最後に、何が主を喜ばせるかということ私たちに語りながら、この詩編は私たちを2つの次元の展望を持つよという招いています。おきてに対する尊敬と信頼です(詩編 147:11 参照)。私たちは、私たち自身や宇宙のエネルギーの恩恵のなすがままにされているのではなく、常に主のみ手の内にあるのです。

2, 主を賛美するよという祝いの雰囲気とする招き(詩編 147:1 参照)の後で、この詩編は2つの詩的で霊的なできごとについて説明しています。最初に、歴史の中の神のみ業が、エルサレムを再建し、バビロン追放後の生活を立て直す建設者のイメージによって紹介されています(詩編 147:2-6 参照)。しかし、主は偉大な職人であると同時に、ご自分を、辱められしいたげられた民の内的、身体的な傷を和らげるために身をかがめる父として示します(詩編 147:3 参照)。

聖アウグスチヌスに耳を傾けることにいたしましょう。彼は、詩編 146(147)の解説において、「主は失意の人(心砕かれた人)を支え、その傷をいやされる」(詩編 147:11)という一節について、412年にカルタゴで次のような解説をしています。「心を砕かれていない人はいやされることはできません。心砕かれた人とは誰のことでしょう。砕かれた心はいやしていただき、傲慢によって飲み込まれた心は地に投げ捨てられます。一度砕かれても、正常に戻ることは可能です。『主は失意の人を支え、その傷を癒される』のです。言葉を変えて言うなら、主は、告白し、罰を受け、厳格に裁かれる、心の謙遜な人をいやし、こうして彼らは主のいつくしみを体験することでしょう。これが、いやされるということです。しかしながら、完全な健康は、私たちの腐敗すべき状態が腐敗しないものを着せていただき、死すべき状態が死なないものを着せていただく時、私たちの死すべき状態が終った時に成し遂げられるでしょう」(5-8 参照 IV, ROME1977, p. 772-779)。

3, しかし、神のみ業は、ご自分の民を苦しみから救い出すことだけではありません。へりくだる人々をいたわりをもって包み、逆らう者たちに対しては厳しい裁判官のようにふるまいます(詩編 147:6 参照)。歴史の主は、人類のできごとにおいて自分たちだけが判断をくだす者であると考えている支配者たちの前で無感覚ではありません。傲慢な者、天に向かって尊大に挑みかかってくる者を地に投げ捨てられます(Iサムエル 2:7-8; ルカ 1:51-53 参照)。

神のみ業は歴史に対して支配権を持つだけではありません。主は被造界の王でもあります。全宇宙は創造主である主の呼びかけにこたえます。主は、数限りない星の配置を決定するだけでなく、ひとつひとつに名前をつけ、その本質と性格を定義付けます(詩編 147:4 参照)。

預言者イザヤは歌いました。「目を上げて見よ。これら(の星)をお造りになったのは誰か。それら(の軍勢)を数えて引き出された方、その名を呼ばれる方」(イザヤ 40:26)。

主の「軍勢」とは星たちのことです。預言者バルクは続けます。「星は輝いて喜び、主の呼びかけにこたえて言う。『ここにいます。』彼らは自分たちをお造りになった方のために喜んで輝く」(バルク 3:34-35)。

4, 賛美を歌うようにというもう 1 つの喜ばしい招きは(詩編 147:7 参照)、第 2 部(詩編 147:7-11 参照)の前奏曲となっています。再び、宇宙における神の創造のみ業が引き出されます。中東地方のような早魃が当たり前の地域において、神の愛の最初のしるしは雨です。雨は大地を肥沃なものにします(詩編 147:8 参照)。このようにして創造主は動物たちのために食べ物を準備なさいます。実際、主はおなかをすかせて泣いているカラスの雛のようなもっとも小さな被造物たちを養うことにさえ心を配っておられます(詩編 147:9 参照)。イエズスは空の鳥に目を向けるようにとおっしゃいます。「彼らは蒔きも刈りも倉に収めもしないのに、天の父は彼らを養ってくださる」(マタイ 6:26 参照; ルカ 12:24 ではカラスとなっています)。

しかし、私たちの注意は被造物から再び人間の生活へと向けなおされます。この詩編は、最初の部分で宣言したとおり(詩編 147:6 参照)、義人やへりくだる者に目をとめ、身をかがめられる主を示すことによって終わっています(詩編 147:10-11 参照)。力を現す 2 つのシンボルが使われています。神の導きが与えられることのないことをほのめかし、それとなく力を象徴している、馬と走っている兵士の足(兵士の数)です。再び、主の論理は、力ある者の高ぶりや傲慢を超え、信じる者たちの側に立ちます。「神をおそれ、そのいつくしみを待ち望む」(詩編 147:11)彼らは、自分たちの行動、考え、計画、日々の生活において自分たちを神の導きに委ねているのです。

ここで祈っている人は、主の恵みに希望をおきながら、神の愛のマントに包まれているという確信にあるべき姿をおいている人々の一人です。「神の注がれる目は神をおそれる人の上に、神の愛に希望をおく人の上に。…心は神のうちに喜び、とうといその名に寄り頼む」(詩編 33:18-19, 21)。

#### 第 4 週 金曜日 朝課 第 1 唱和

#### 詩編 51 4

1, 朝の祈りについての私たちの考察において、あの有名なあわれみの詩編 51 番を取り上げるのも、これで 4 回目になりました。本当に、この詩編は、毎週金曜日に私たちに新たに差し出されますから、心の内に潜む悪を見出して、主に清めとゆるしをこいねがうことができる黙想のオアシスとなることでしょう。本当に、別の詩編がもう一つの嘆願をもって告白しているように、「生きている者でああなたの前にとがのない者はない」

(詩編 143:2)。私たちはヨブ記の中で読みます。「人はどうして神の前に正しくありえようか。女から生まれた者が、どうして清くありえようか。見よ、月さえも輝かず、星も神の目には清くない。まして、一匹の蝸(うじ)にすぎない人間や、虫けらにすぎない人の子は、なおさらである」(ヨブ 25:4-6)。

これらは、人間という被造物のまったく深刻で重大な限界ともろさ、悪と暴力、不潔

と虚偽を撒き散らす人間の邪悪な力を描き出している、力強くドラマティックな言葉です。しかしながら、この詩編が回心した罪人ダビドの唇にのせている「Miserere（あわれんでください）」という希望のメッセージがあります。悔い改めた心で告白した罪を「取り去って、洗い清める」ことが神にはおできになるのです（詩編 51:2-3 参照）。イザヤの声を通して、主は言われます。たとえ、「あなたの罪は緋のようでも、雪のように白くなる。紅のようでも、羊毛のようになる」（イザヤ 1:18 参照）。

2、今回、私たちは詩編 51 番の終わりの部分、希望に満ちたフィナーレについて考察することになるでしょう。なぜなら、ここで祈っている人は、神が自分をおゆるしくださった、ということを知っているからです（詩編 51:17-31 参照）。この人の唇には主への賛美があります。この人は、悪から清められたことによって良心の呵責から解放された魂の感じている喜びを証しするために、この世に向かって高らかに声をあげようとしているのです（詩編 51:17 参照）。

ここで祈っている人は、預言者たちによって繰り返されてきた教え（イザヤ 1:10-17、アモス 5:21-25、ホセア 6:6 参照）につながっている、もう一つの確信をはっきりと証しています。芳香やかぐわしい香りのように主のもとに立ち昇るもっとも喜ばれるいけにえ（創世記 8:21 参照）は、雄牛や羊の焼き尽くす捧げ物ではなく、「打ち砕かれ、悔い改めた心（詩編 51:19）」なのです。

『キリストに倣いて』、キリスト教の霊的伝統にとって貴重なあの書き物は、この詩編とおなじ勧告を繰り返しています。「数々の罪を謙遜に痛悔することは、あなたをお喜ばせるいけにえ。その香りは香の煙にはるかにまさる甘美なもの…。そこにおいて、人は清められ、一つ一つの罪が洗い落とされる（Ⅲ52, 4 参照）」。

3、この詩編は、矛盾とも見えるようなまったく異なった展望の内に、思いがけないことに言い及んで終わっています。一人の罪人の最後の嘆願から、エルサレム再建のための祈りになっていくのです。この祈りはダビドの時代から数世紀後の町の崩壊の時代へと私たちを連れていきます。その上、18 節では動物のいけにえを神が拒絶なさったことが語られていたのに、21 節ではこの同じ焼き尽くす捧げ物に関して、神が喜んで受け取ってくださるであろう、と宣言しています。

この最後の一節が次の二点によって、確かに、ダビドの詩編の釣り合いをとるか、あるいは少なくともその不均衡を満たすつもりで、流刑時代に作られた、後代の書き入れであることは明らかです。まず、詩編全体が個人的な祈りに限定されながら、町全体の嘆かわしい状態を思い起こすことも必要である、というのは合点がいきません。一方、儀式上のいけにえを神が拒絶なさったことに対して新しい次元が生じることへの憧れがありました。トーラーの中で神御自身が命じておられた礼拝であったがゆえに、この拒絶は完全でもなく決定的なものでもありませんでした。この詩編を完成させた人は、確実な根拠をもって次のことを直感していたのです。この人は、罪人たちが必要としている状態、つまり、生贄による取り成しを必要としていることを理解していたのです。罪人たちは、自分で自分を清めることはできないのです。良い意向だけでは十分ではありません。力ある外からの取り成しが必要とされるのです。新約では、この洞察の完全な意味を明らかにしています。つまり、キリストが御自分の命を捧げることによって完全ないけにえによる取り成しを成し遂げられたことを示しているのです。

4, エゼキエル書についての説教の中で、大聖グレゴリオ「Miserere」の19節と21節の間に生じてきた外観の変化に関して素晴らしい理解を示してくれました。大聖グレゴリオは、私たちの考察の結びにできるような解釈を示唆しています。聖グレゴリオは、悔い改める心に関して語られている19節を教会の地上の生命にあてはめ、焼き尽くすいけにえに関して語られている21節を天上の教会にあてはめているのです。以下はこの偉大な教皇の言葉です。「聖なる教会は二つの生命を持っています。一方は教会が時間の中で生きるものであり、他方は教会が永遠に享受するものです。教会は地上において一方によって戦い、天上において他方を報いとして受けるのです。教会は一方によって功德を積み、他方はこれまでの報いとして、これから先、楽しむことになるのです。この生命のどちらにおいても、教会はいけにえを捧げます。この地上では、痛悔といういけにえです。天上においては、賛美のいけにえです。最初のいけにえに関しては次のように言われています。「神が受け入れてくださるいけにえとは打ち砕かれた霊(詩編51:19)」。後の方のいけにえに関しては次のように書かれています。「その時、あなたは正しいいけにえ、焼き尽くすいけにえ、焼き尽くす捧げ物を喜ばれるでしょう」(詩編51:21)。どちらも肉がささげられるのですが、先の方では、肉のいけにえとは体の禁欲のことで、後の方では、肉のいけにえとは神への賛美の内にある復活の栄光なのです。天国においては、肉は焼き尽くす捧げ物として捧げられることになるでしょう。その時、肉は腐敗することのないものへと変容され、私たちにはもはや闘争もなく、死に定められたものもありません。私たちの肉は永遠の賛美の内に、神への愛によってまったく燃やされ続けることになるからです」(エゼキエル書の説教/2、ローマ1993、p. 271)。

#### 第4週 金曜日 朝課 第3唱和

##### 詩編 147:12-22

1, ただ今、私たちの考察のために差し出された詩編は、以前取り上げたことのある詩編147の第2の部分です。しかしながら、古代ギリシア語及びラテン語の翻訳は、典礼にしたがって、その始まりがそれ以前の部分から明白に区別できることから、独立した賛歌と見なされてきました。ラテン語圏においてはしばしば旋律を付されることから、この始まり *Lauda, Jerusalem, Dominum*. はたいへん有名になりました。この始まりの言葉は、主をたたえ賛美する詩編の典型的な招きです。ここでは、エルサレムは民を体現し、自分の神を崇め、栄光を帰するようにと招かれています(詩編147:12)。

ここで言及されているのは、何よりもまず、ここで祈っている共同体がその賛美を主に向かって立ち昇らせなければならないということの理由です。その本質は歴史的なものです。バビロン捕囚から解放してくださったのは、主であり、都の「門のかんぬきを固め」(詩編147:13)ることによってご自分の民に安全を与えてくださったのです。

紀元前586年、エルサレムはネブカドネツアル王の軍隊によって陥落しました。哀歌の書は、イスラエルの罪に対する裁き主として、主が「おとめシオンの城壁を滅ぼそうと定め、…城壁はことごとく地に倒れ、かんぬきは砕かれた」(哀歌2:8-9)ということ



を、主ご自身に向かって披瀝しています。にもかかわらず、今、主は聖なる都の建設者として帰ってこられたのです。神殿を建て直すことによって、主はご自分の息子たち、娘たちを再び祝福してくださるのです。つまり、ここで言及されていることは、エルサレムの城壁を建て直したネヘミアによって成し遂げられた仕事(ネヘミア 3:1-38 参照)のことです。こうして、都は再び落ち着きと平和のオアシスとなったのです。

2, 本当に、エルサレムという名に象徴的にふくまれている通りに、ためらうことなしに、平和 shalom が呼びさまされたのです。預言者イザヤはすでにこの都に約束していました。「私は平和をあなたの見張りとし、正義をあなたの監督とする」(イザヤ 60:17)。

しかしながら、都の城壁を修理し、平安のうちに祝福と和解を与える以上に、神はイスラエルにこの詩編の最後に描写されている本質的な賜物を差し出しています。掟、律法、神法という賜物が思い出されています。『神は身ことばをヤコブに知らせ、定めとおきてをイスラエルに告げられる』(詩編 147:19)。

このような方法で、イスラエルの選びと諸国民の間で彼女が果たすべき使命、すなわち神のみ言葉を告げ知らせることが、たたえられています。これは、預言的かつ司祭的な使命です。「今日あなた方の前におかれたすべてのおきてほど正しいおきてと法とを持つ偉大な国民がまたとあろうか」(申命記 4:8)。イスラエルを通して、さらにはキリスト者の共同体、つまり教会を通して、神のみ言葉はこの世界に響き渡り、すべての人々の導きと光になるのです(詩編 147:20 参照)。

3, 私たちが主をたたえるべき第1の理由を述べました。それは、歴史的な理由で、解放とご自分の民に表された神のみ業でした。

ここにはもう1つ、崇めたたえる理由があります。神の創造の働きと関連している宇宙の本質に関することです。それは、メッセンジャーのように、地の一方から他方へと走っていきます(詩編 147:15 参照)。そして、突然素晴らしいことを花咲かせます。

今、冬が到着し、その気候現象が詩的な筆遣いで描写されています。雪はその白さのゆえに羊毛のようです。霜はその繊細なかけらによって荒野の灰のようです(詩編 147:16 参照)。あられはパンくずのように地にまかれ、氷は地を凍らせ、植物の成長をとめてしまいます(詩編 147:17 参照)。この冬景色は、もう1つの聖書の箇所、シラ書(43:18-20)の写実的なページで取り上げることになる創造の素晴らしさを発見するようにと招いています。

4, ご覧なさい、それから、春、常に神のみ言葉のみ業によって、再び花が咲き乱れます。氷はとけ、暖かな風が吹き、水は流れ(詩編 147:18 参照)、季節は移り変わり、男性たちと女性たちのためには命について同様の可能性が繰り返されています。

当然のことながら、神のこれらの賜物についての比喩的な読み方は、欠かせません。「よい麦」は秘跡のパンの豊かな賜物を考えさせることでしょう。実際、3世紀の偉大なキリスト教著作家オリゲネスは、特に小麦をキリストご自身と聖書のしるしと見なしていました。

次のように解説しています。「私たちの主は地に落ちて、私たちのために何倍にも増えた一粒の麦です。この一粒の麦は数え切れないほど多くなりました。神のみ言葉は数え切れないほど多く、それ自身の中にあらゆる楽しみを封じ込めています。ユダヤ人たちがマンナを食べた時、一人ひとりの望みに応じた味がした、と彼らが報告しているの

と同じ方法で、あなたが知っているすべてのものは神のみ言葉から来たのです。聖書を理解できるように教えてください。み言葉であるキリストの肉によって、私たちの憧れはもっと大きくなり、私たちはもっと大きな食物を受けるのです。あなたが聖なるものであるなら、慰めを見つけるでしょう。あなたが罪人であれば、贖いを見出すでしょう」(Origen-Jerome, 74 omilie sul libro dei Salmi ヒエロニモ訳オリゲネス, 詩編についての74の説教, Mirano1993, p. 543-544)。

5, 主は創造の時だけでなく歴史の中でも働いておられます。主は自然界の沈黙の言葉によってご自身を啓示されています(詩編 19:2-7)が、聖書を通してはっきりとした方法で、また預言者たちを通して人格的な交わりによって、そして、御子を通して完全に、ご自身を表されました(ヘブライ 1:1-2)。これら2つは、異なっていながらひとつに結ばれている主の愛の賜物なのです。

この理由から、私たちの賛美は、日々、天に向かって立ち昇っていかなければなりません。それは、夜明けに、命と解放、存在と信仰、創造と贖いの主を祝するために朝の祈りの内に花咲く私たちの感謝なのです。

#### 第4週 土曜日 朝課 第1唱和

#### 詩編 92

1, ただ今私たちに差し出された賛歌は、聖なる神に忠実な一人の人の歌で、この作品にあてられている古代のタイトルが示すとおり、ユダヤ人の伝統によって「安息日のために」用いられてきた詩編 92 です。この賛歌は、音楽と歌によって主をたたえ祝うようにという一般的な呼びかけによって始められています。神の愛は、一日の始まりである朝に崇められ、日中にも、夜の間にも宣言されるべきであることから、尽きることのない祈りの流れのように思われます。この詩編作者は、楽器について考察している導入部の招きによって、聖アウグスチヌスを感じさせました。詩編 92 の解説において、次のように語っています。「兄弟の皆さん、詩編をもって賛美を歌うことにどのような意味があるのでしょうか。詩編は弦楽器です。私たちの詩編は私たちの仕事です。自分たちの手によって善を行なう人々は詩編によって神をたたえているのです。自分たちの唇によって告白している人々は、自分たち歌によって神をたたえているのです。歌は彼らの唇にあり、彼らは自分たちの行いによって神をたたえています。…ですから、歌っている人とは誰のことでしょうか。善を行なうことを喜んでる人々のことです。使徒は何と言っているのでしょうか。『神は喜んで与える者を喜ばれる』(II コリント 9:7)。何をすることも喜んで行ないなさい。こうして、あなたは善を行い、それをよく果たすことができるでしょう。一方、あなたが仕事をするとき投槍になっているなら、あなたを通して善が行なわれているにもかかわらず、それは行なっているのはあなたではなくなってしまう。あなたはその手にリュートを持っていない、あなたは歌っていないのです」(詩編註解 III, Rome, 1976, p. 192-195)。

2, 聖アウグスチヌスの言葉を通して、私たちは、この黙想の中心に入り、この詩編の

中心的な主題に取り組むことができます。善と悪。どちらも正しく聖なる神によって見極められています。「すべてを超える」神は、永遠不滅であり、いかなる人間活動もこの神から逃れることはできません。

この2つの異なる形式の行いが繰り返し比較されています。この行いにおいて、忠実な人は、神のみ業をたたえることに献身し、主のみ心の深みを見通し、その生活は主の道において光と喜びに輝いています。対照的に、詩編作者は、人間のなすことの隠れた意味を理解する能力をもって、悪人の重苦しさを描写します。束の間の幸運は彼を思い上がらせますが、彼は基本的に弱く、過ぎ去ってしまう成功の後で失望と死へと定められています。詩編作者は、報復という旧約で親しまれている解決の鍵を用いながら、神は、義人にはすでにこの世から幸せな長寿という報いを与え、悪を行う者にはずっと以前から罰を下されるのだ、と確信させられています。

実際には、ヨブが力説し、イエズスが教えたほどには、歴史の中で明白に現れてはこないのです。ですから、詩編作者の見解は、「すべてを超える」正しい神に向かって、人間活動の場面の中に入ってきて、彼らを裁き、善を輝かせてくださるよという嘆願となるのです。

3, 義人と悪人とのコントラストは、ここで祈っている人によって続けて取り上げられています。一方では、主に「逆らう者」、「悪を行なう者」は、あとかたもなく滅びさるよと定められています。一方、信じる者は、東洋的な象徴からイメージをとった描き方によって自らを描写している詩編作者によって体現され、完全な輝きの内に現れます。義人は野牛の打ち勝ちがたい力を持ち、いかなる敵の挑戦にも準備されています。彼の栄光に満ちた額には、選ばれた者を守り、彼を保護してくれる楯となる神のご保護の油が注がれています。ここで祈っている人は、力強く安全な住まいから、滅びの淵に放り出された悪人たちを眺めています。

こうして、詩編 92 は、特に、不信頼と絶望の誘惑の時代にある私たちが、神に願わなければならない賜物である、幸福、信頼、楽観主義についての黙想となります。

4, 最後に、深い平和にひたされた雰囲気の中で、この賛歌は義人の高齢期における恵みを示し、彼らが皆等しく穏やかであることを予め告げています。たとえ、その日々が地平線にかすんでこようとも、ここで祈っている人の魂は生き生きとして幸せで活発で、シオンの神殿の中庭に植えられた椰子の木や杉の木のように、花咲き実り豊かだと感じることでしょう。

義人は神ご自身の内にあって輝き、神から神の恵みの樹液を吸収しています。主の命は彼らを養い、彼らに花を咲かせ、自分たちの信仰を他の人々に分かち合い、証しすることのできる生きる力で満たします。激しい労働の生活を送り、熱心で活動的な高齢者である義人について描写している詩編作者の最後の言葉は、主の永遠の忠実さを宣言することに関連付けられています。ここで、私たちは、聖書の最後の書である黙示録の中で神の栄光に向かって立ち昇っていく歌を取り上げることによって終わることになりました。黙示録は、善と悪との激しい戦いの書であるとともに、キリストの最終的な勝利への希望の書でもあります。「全能の神である主よ、あなたは偉大、そのわざは不思議。諸国の民の王である主よ、あなたは正しく、その道はまこと。ただひとり、あなたは聖なる方、すべての人はあなたをおそれ、その名をたたえる。あなたの正しいさ

ばきは明らかにされ…その裁きは正しい。今あり、かつておられた聖なる方、そうです、あなたは全能の神である主。あなたの裁きは正しくまこと」(黙示録 15:3-4;16:5,7 参照)。

#### 第4週 土曜日 朝課 第3唱和

(この日、教皇様のお加減は思わしくなく、ソダノ枢機卿様がメッセージを伝え、教皇様はテレビ中継をご覧になっていました)

#### 詩編8

1, 素晴らしい賛美の歌である詩編8の黙想において、朝の祈りの典礼の祈り深い心を作り上げている詩編と賛歌をたどる長い巡礼は終りを迎えました。このカテケジスにおいて、84の聖書の祈りを、それらが持つ詩的な美しさを見逃すことなく解説していくように霊的に熱心に務めながら考察してまいりました。

実際、聖書は、私たちの一日を、神によって書かれた優れたことごととそれに対する私たちの信仰という答えをただ朗読するようにと招いているのでなく、美しく照らしに充ち、同時に優しさと力強さに充ちた方法で、楽の音に合わせて祝うように(詩編 48:8 参照)と招いています。

詩編8は、何にもまして輝かしい模範です。この詩編の中で、人は夜に飲み込まれ、無限に広がる天に月が昇り星がきらめくと、自分を覆う終わりもなく果てしもない空間に比べると一粒の砂のようだと感じています(詩編8:4 参照)。

2, 事実、詩編8の中心部では、二重の体験が描写されています。一方では、人は、神の指のわざである創造の壮大さにほとんど打ちのめされているように感じています。興味深い一節が、神の「手のわざ」(詩編8:7 参照)を、あたかも創造主が、広大な天に散りばめられた輝く星の絵を描くか、刺繍をしているかのような表現をしています。

しかし、一方では、神は人に向かって身をかがめ、ご自分の代理者としての「栄えと誉の冠を授け」(詩編8:6)ます。事実、神はこのはかない被造物に全宇宙を委ね、こうして彼はそこから知識と自分が生きていることの意味を引き出しています(詩編8:7-9 参照)。

他の被造物たちに対する人の支配権の地平線は創世記の初めのページを思い起こさせます。羊や牛、ののけもの、空の鳥、海の魚は人に委ねられ、こうして彼らに名前をつけました(創世記2:19-20 参照)。人はそれらの意味深い現実を見出して尊敬をもって、自らの働きを通して変容させ、完成していきます。こうして、この支配権は美と命の源となるのです。この詩編は私たちに自分たちの偉大さに築かせてくれるだけでなく、被造物に対する責任をも理解させてくれます(知恵9:3 参照)。

3, 詩編8を再解釈しながら、ヘブライ人への手紙の著者はこの詩編のカナに人間に対する神のご計画についてより深い理解を見出しています。人の召し出しは地上の世界の「今ここ」に限定することはできません。この詩編作者が、神は人の足の下にすべてのものを置いたというなら、神は「来るべき世」(ヘブライ2:5)、「揺らぐことのないみ国」

(ヘブライ 12:28)をも人に支配させることをお望みのはずです。つまり、人の召し出しは「天的呼びかけ」(ヘブライ)3:1なのです。神は「多くの子らに」(ヘブライ 2:10)天上の「栄光をもたらすこと」をお望みになっておられるのです。この神のご計画が成就されるために、人の召し出しがその最初の成就を見出すことのできる「創始者」(ヘブライ 2:10)の生涯を描き出さなければなりません。この創始者こそはキリストです。

ヘブライ人への手紙の著者は、このことについて、この詩編の言葉が、他の人々以上に特別に、独特な方法で、キリストに当てはまるということを強調しています。事実、詩編作者は神について語りながら「より低い者とする(近いものとされた)」という動詞を用いています。「あなたは彼をしばしの間天使たちより低い者とし(神に近いものとし)、栄えと誉の冠を授けられた」(詩編 8:6;ヘブライ 2:6)。普通の人々にとって、この動詞は誉め言葉です。彼らは天使たちより高かったことは決してなかったのですから、天使たち「より低い者とされる」ことはないのです。しかし、キリストは、神の子として天使たちよりも上におられ、そして、人となった時に、より低いものとなったのですから、彼にとっては文字通り、まさにこの動詞の通りです。ですから、キリストは復活された時、栄光の冠を受けたのです。こうして、キリストは人の召し出しを完全に成就し、これを「すべての人のために」(ヘブライ 2:9)してくださったのだ、と著者は説明しています。

4, この光の中で、聖アンブロジウスはこの詩編について解説し、これを私たちに当てはめています。彼は、人に冠を授けることを描写している「栄えと誉の冠を授け」(詩編 8:6)という一節から始めています。

残念ながら、以下の部分は喪失されています